

文学部・文学研究科

I	研究水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-3

1 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 18 年の教員一名当たりの論文数が 2.47 件、学術講演・研究発表数が 1.45 件であるなど、活発な研究活動が見られる。また、21 世紀 COE プログラムでの研究活動は研究科の特色を活かしたものとなっている。さらに、海外の研究者との共同研究も積極的に実施しており、受け入れている外国人研究者は、平成 19 年度 33 名である。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金等の外部資金の獲得が極めて良好であり、当該研究科単独で 21 世紀 COE プログラムに 1 件採択されていることは、優れた成果である。

以上の点について、文学部・文学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、文学部・文学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、言語や文学をめぐる新たな視点からの研究や、哲学・歴史分野における視野の広い研究、行動科学分野における研究等で卓越した成果が生み出されている。卓越した研究成果として、古教会スラブ語を対象とする中世スラブ語研究、プルーストの作品における絵画提示に関する研究、チャールズ・パースの宇宙論・形而上学に関する研究、日本中世における仏師の活動や社会的位置付けに関する研究、猿の脳を用いて脳の情報処理機能を解明した研究が挙げられる。また、学術面の業績については、社会的意義を持つものが少なくない。社会、経済、文化面では、優れた成果として、西田幾多郎の哲学入門といえる研究や、ギリシア神話入門を著した研究があり、新聞や学術雑誌等専門誌の書評で取り上げられ高い評価を得るなどの優れた成果がある。

以上の点について、文学部・文学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、文学部・文学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

相応に改善、向上している

当該組織から示された事例は5件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」または「相応に改善、向上している」と判断された。